第３回白馬村学校のあり方検討委員会　議事録

１　日　時　　令和　３　年５月　２５　日（火）
　　開会　午後　２時００分　　閉会　午後　３時４０分

２　会　場　　ウィング２１　多目的室（北）

３　出席者　　委　員　　花岡　秋好
　　委　員　　柏原　輝久
　　委　員　　蟹澤　秀人
　　委　員　　柏原　周平
　　委　員　　高野美海子
　　委　員　　徳武　信一
　　委　員　　吉沢　一夫
　　委　員　　松下　設吉
　　委　員　　浅原　昭久
　　委　員　　清水　　蛍
　　委　員　　塩島　弘之
　　委　員　　窪田徳右衛門

　説明者等　　教育課長　　横川　辰彦
　　教育係長　　中村　由加

４　報告　　白馬村教育環境の現状報告（中学校）

５　協議　　少子化をテーマにして

６　議事の大要

○開　会
（教育課長）
　人口減少化時代を迎え、白馬村でも子どもの数は減ってきており、加えて両小学校も５０年くらいの築年数となり老朽化も進んでいる。これからの白馬村の学校についてどの様にしていけばよいのか考える中で、様々な問題点をこの委員会で検討いただき、その意見を基に教育委員会では教育の基本を作っていこうというものである。
　前回は、白馬村の両小学校の教育活動や特色、現在の状況について、校長先生から紹介していただいた。今回は中学校の教育活動等について校長先生から紹介していただき、学校教育の現状を認識していただいた上で、議題を絞って話し合いをしようということなっている。話し合う範囲が広いと論点も定まらないので、予め委員長、副委員長、事務局で論点を絞る相談を

させていただいた。その中で、財政的なことや施設の老朽化をこの委員会で論じるものではなかろうということになり、必ずやってくる少子化時代、子どもが一層減る中でどのように魅力的な学校を維持していくか、どのような学校が良いのかについて議論したほうが、論点が定まるのではないかということになった。

そこで本日、協議事項として「少子化をテーマにして」を挙げさせていただいた。この会では、学校、地域、保護者等それぞれのお立場から少子化について論じていただき、少子化時代におけるあるべき学校の姿をまとめていきたいと思う。

この会は、10 月か 11 月くらいまでに答申をまとめて教育委員会に提出する予定で、毎月 1 回、会議を開催するペースになる。最初の諮問の折にも話したが、この委員会において将来的な方向性を定めるものではなく、「こういったあり方が良い」または「こういった問題がある」ということを提言するまとめ方になろうかと思うのでお願いする。

○委嘱状交付

4 月の役員改選や人事異動により、今回から新たに委員になった者に委嘱状を交付（机上配布）する。

○自己紹介

全員で自己紹介

○委員長挨拶（塩島委員長）

新しい委員を迎えてまたスタートさせていただくことを嬉しく思う。是非忌憚のないご意見をいただき、実りある委員会にしたい。会議終了時間は 3 時半頃を目安とする。

初めに白馬中学校の浅原校長から、学校の様子について説明していただく。

○報　告

（浅原白馬中学校長）

白馬中学校の令和 3 年度のグランドデザインと学校評価アンケート結果を資料に教育状況を説明。

白馬南小・北小から入ってくる子どもに加え、インターナショナルスクールから来る子どももいる。海外にルーツを持つ子どもが学年によっては 10%を占める場合もあり、本当に多様である。この多様性が白馬の魅力であり、これだけ多様であると今までのやり方では上手くいかなことも感じている。今までの学校のあり方から離れて、形にこだわらないスタイルでやってきたつもりである。

昨年、コロナ禍で難しい対応を迫られる中、白馬中ではあらゆる教育活動がストップしなかった。コロナを乗り越えたという面では昨年は県下のみならず全国の中でも輝いた学校であったと感じている。今後の学校づくりでいうと、その多様性から未来的な学校を作るイメージでいる。

昨年度の学校評価アンケート結果によると、総じて「とても良い」「おおむね良い」が 9 割を超えるものが多く、白馬中の活動を全般的に肯定的に見ていただいていることに感謝している。その理由として前向きで素直な子どもたち、温かな保護者等がいる。

教育目標の「たのし　うれし　白馬われら」は校歌の一節であるが、生徒、教師、保護者皆があらゆる場面でこの教育目標を感じていけるように努めていこうと呼びかけており、保護者の皆さんもそれを覚悟して協力してほしいと呼びかけた。そんな中、昨年度４月にコロナ禍で色々なことがストップしたが、白馬中は地域の皆さんの協力や教育委員会の取組みにより、子どもたちが家にいてもできるオンライン授業を 10 日間という短期間で実現することができた。

また、コロナ禍にあっても、唐松登山、総合発表会、白馬国際フォーラム、東北への修学旅行等を地域の皆さんの協力や工夫により実施できたことが「たのし うれし 白馬われら」に繋がり、評価を得たと思っている。今年度も with コロナ時代に「かけがえのない今を生きる子どもたちの学びを止めない」という決意をもって、地域の皆さんや教育委員会の支援を受けながら学校教育を推進していきたい。

SDGs と ICT への取組みは長野県の中で先を走っている。地域の皆さんと結びつくことで、他の市町村ではできないことができる可能性がある。ここのオリジナリティーを出した活動を行うことで子どもたちが白馬の良さを自覚して、世界や地域に貢献できる人材に育ってくれればと願う。

（塩島委員長）

浅原校長先生から、コロナ禍でも学校と地域の方々が一体となって取り組んだこと等をお話しいただいた。質問や意見があればお願いする。

特にないようなので、また何かあればこの後の話し合いの中で出していただきたい。

それでは、協議事項の「少子化をテーマにして」に入るが、教育委員会から資料が示されているので、まずその資料について説明していただく。

〇説　明

（教育係長）

資料１、２－（１）、２－（２）により、白馬村における少子化の現状について説明する。

資料「１白馬村の人口推移及び推計」を見ると、白馬村の人口は平成 17 年をピークに減少に転じ、直近の国政調査である平成 27 年では 8,922 人となっている。０－14 歳、15－64 歳、65 歳以上の年齢３区分別にみると、平成７年から平成 27 年にかけて年少人口割合の減少と老年人口割合の増加が続いている。また、平成７年から平成 22 年にかけて横ばいとなっていた生産年齢人口割合は平成 22 年から減少に転じた。

将来人口について、国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）が平成 30 年に行った推計によると、白馬村の人口減少は今後も続き、令和 27 年の人口は 6,315 人になるとされている。また、この「社人研」の推計値によると、令和２年以降も年少人口割合と生産年齢人口割合は減少し、老年人口割合の増加が続く傾向にある。年少人口割合については、令和７年から 27 年までは９％半ばでほぼ横ばいになる見通しとなっているが、下回る場合も大いにある。

資料「２－（１）白馬村児童数の推移」は児童数の今後の推移である。

このグラフの人数については、令和４年以降は、現在白馬村に住民票のある児童数を積み上げたものである。実際には転入・転出等の出入りがあるが、それらの数値を加えていない、住民数で

の表示をしている。

資料「２－（２）南・北小学校の学年別児童数」の表で、令和３年度を見ると、南小は１年生17 人にはじまり６年生 20 人で 98 人在籍している。同様に北小は 316 人在籍していて、合計で414 人。10 年前の平成 23 年はどうだったか。南小 118 人、北小は 359 人在籍していた。合計で477 人。10 年間で 63 人減少した。

では今後どうなるのか。令和９年度の南小は 87 人、北小は 223 人、合計で 310 人。令和３年度が南小・北小併せて 414 人なので、令和３年度から今後６年間で児童数は 104 人減少する。これは白馬南小１校分の児童が減少することを表している。また、南小より北小の児童数の減少幅が大きいことが言える。

平成 23 年から令和３年度の 10 年間に 63 人減少したが、これから６年後の令和９年には 104人減少する。1.7 倍近いスピードで子どもの数が減ることになる。

児童数の減少速度加速していく中で、小中学校のクラス編成はどうなるのか。

資料３、４により、適正とされている学級数や、標準とされる１クラスの児童生徒の人数、複式学級の基準、学級数に応じて配置される教員数等について説明する。

資料「３　法令等からみた学校の規模」を見ていただきたい。

「適正とされる学級数」については、小学校中学校ともに 12 学級以上 18 学級以下が適正な学級数と位置付けられており、白馬村の場合は北小のみ適正ということになる。

「学級編成の標準」については、国の基準と長野県の基準が若干異なっている。国で定める１学年の児童生徒数の基準を踏まえ、長野県では独自の基準を定めている。表の２行目に「同学年の児童生徒で編成する通常学級」とあるが、１クラスの人数について国は小学校の１・２学年だけは 35 人、それ以外の小学校３年生から中学校２年生は 40 人を基準としている。一方、長野県は小中共に全学年１クラス 35 人が基準となっている。

複式学級の基準について、複式学級とは２つ以上の学年をひとまとめにする学級編成を指す。ここでも、国の基準と長野県の基準は若干違う。国の基準では、小学校の場合は１年生を含む場合で８人以下になってしまった場合は複式学級、それ以外の学年だと 16 人以下で複式学級に編制される。中学校はすべての学年が８人以下になってしまった場合は複式学級となる。つまり、隣り合う学年で１年生と２年生を足して９人以上いない場合は１つの学級になる。

長野県は２つの学年を合わせた児童数が９～16 人のときにおいては県費負担により講師等教員を派遣し、複式解消を独自に図っているため、児童数の少ない白馬南小においても当面、複式学級にはならない。

次に資料「４　教員配当基準」を見ていただきたい。

この表は、学級数に応じた先生の配置を示している。左側は小学校教員配当基準だが、学級数に応じて、校長先生、教頭先生、担任の先生が付く。右から２番目に専科の先生の部分があり、６学級の場合に１人、14 学級の場合に２人と配置される。専科の先生は例えば、小学校でいうと音楽の先生や理科の先生が多い。

右側は中学校教員配当基準で、同じように専科の先生は学級数に応じて配置される。中学校の専科の先生は、音楽、保健体育、技術家庭科等が挙げられる。

（教育課長）
補足説明。
学校の規模や教員配置について、義務教育の教員配置は県から派遣されるが、派遣にかかる人件費については国から交付金が出るしくみになっている。国はどのように各県に交付金を出すのか、それは標準として決めている規模（35 人～40 人）を基に支出しているが、長野県は県独自で 35 人を標準として教員配置に県費を支出している。さらにそれでも足りない場合は村が村費の講師として加配や学習支援員等を配置している。子どもの人数が減ってくれば学級数が減り、先生の数も減るということが法律で決まっているということを理解いただきたい。

○協　議
（塩島委員長）
事務局からの説明で急激に子どもの数が減ることがわかった。今から 6 年後には南小学校 1 校分以上の児童が減ってしまう。村の人口が減っているから、子どもの数も減るのは仕方がないことだが、特にこの 6 年間で急激に減っていくことを想像して、少子化がこのまま進んでいくとどういう問題が出てくるのか、逆にメリットはどんなことがあるか意見を伺いたい。
また、今までも子どもの数は減ってきている訳で、今感じていることでも結構である。
学校、家庭、地域、行政といったそれぞれの立場から課題が出てくると思うが、課題の裏返しは将来的に学校に望むことに繋がってくると考えるので、皆さんからご意見をいただきたい。
まずは、学校の立場からということで、校長先生方にお話を伺う。

（松下白馬北小学校長）
学力の面から言えば 1 クラスの人数が気になる。北小は多いところで 30 人、少ないところで 20 人くらいだが、30 人だと先生の目が行き届かないが 20 人くらいなら目が行き届くような印象を持つ。比較するからそう感じてしまうかもしれないが、今後、ICT 化が進み共同的な学習や個別化の学習がしやすくなれば、人数が多くて目が届かないといったデメリットはある程度解消はできると思う。
行事はそれなりの数がいないとやりづらい。県下の小さい学校は工夫し地域と密着しながら上手くやっているのでやり方の工夫が大事だと思う。少子化ではないが、昨年から北小に来て一番感じているのは施設の老朽化で、何とかしていきたいと思う。

（吉沢白馬南小学校長）
松下校長の言うように人数がある程度少なくなることで良い面もあるが「主体的、対話的、深い学び」が求められている中、多様性や色々なものの考え方を知るということを考えると、クラスの人数はある程度いないと難しい。少人数の教室だと数人の意見に皆が簡単になびいてしまう状況もあり、いろいろな意見を聞きながら自分の考えを深めることが難しくなる。ICT 教育が進めば、教室外の人と繋がりながら色々な多様性を取り入れることはできるかもしれないが、日々の子どもたちの生活のベースは教室の中にある。その中で自分と違う考え方に触れながら成長していくことが理想と思うが、少人数では寂しさや苦しさがあるように思う。方策は色々あるかもしれないが、実際にはある程度の人数を確保して教育したいと感じる。

（塩島委員長）
子どもたちが不利にならないよう多様性を求めるような工夫という観点からすれば、ICT は役立ちつつある状況でしょうか？

（吉沢白馬南小学校長）
小学校でもタブレットを使った学習を進めているが、小学生の場合、低学年はまずタイピングの練習等から始まるので、中学生のようにすぐに外と繋がるのは難しい。

（A 委員）
役場に勤めていた頃、南小・北小、両方の行事に参加することがあって様子を見てみると、小さい学校は小さいなりの、大きい学校は大きいなりの魅力がある。例えば運動会で言うと、南小は全校リレーで子ども一人一人が走ることができるのですごく盛り上がるし、北小はクラスの代表として走っている子をみんなで応援する雰囲気が表れていた。小さい学校は一人が主役になれるし、大きい学校は団結力が表れていて良かったので、一概にどちらが良いとも言えない。少子化を悲観するよりも、逆手に取って活用していくことが大事であると感じる。

（B 委員）
先ほどの中学校の校長先生の話を良いと思って聴いていた。特に人が今少なくなっている中で、地域の人たちの力を取り入れて対応していること、さらにそれを広めて、ここで教育を受けられて良かったと子どもたちが思えるような方向性づけ、子どもたちにプライドを与えていくことを考えられているようなので、そういうのって子どもたちにも伝わると思う。大人になって振り返ってみれば、少数精鋭というか、自分は最高の教育を白馬村で受けてきたと言えるような感じになっていくのが良い。人数が少ないということは、丁寧に子どもたちを見ることができる。大人数の中の自分という感覚が薄れて、自分の人生の主役は自分ということが掴めるのではないかと思う。そういう方向で教育が行われていく場所であってほしい。

（C 委員）
上の子を出産したときに美麻村にいたが、その時の息子の同級生は息子を入れて 6 人しかいなかったので、自分は関東から来たけれど、このまま小学校に入れてしまったら人数が少ないと思い白馬に引っ越してきた。今北小に通っているが、1 学年 64 人くらいからのスタートで 1 クラス 30 人以上だったので、松下校長の言うようにやはり少し多いような印象を受けた。また、少子化とは関係ないかもしれないが、老朽化が激しいのが気になる。ロッカーが傷ついていて担任の先生が子どもたちにケガさせないように色塗りしてくれたが、とげが刺さったり擦り傷になったというのを聞いている。

（D 委員）
1 クラス 20 人弱くらいが良いのかなと漠然と思っている。廃校寸前の学校にいたことがありそこは本当に少なかったが、地域の人もすごく子どもたちを応援してくれて、子どもがまっすぐに育っていて魅力があった。多い方についても、私自身が 40 人以上のクラスで過ごした経験から言うと、いろんな子がいるので多様性に触れられて切磋琢磨できるという良い点があ

ったが、実際先生の目は行き届いてなかった。それも先生次第ではあると思うが。学力向上の面では、少ない方が学力が向上するというデータもあれば、少人数でも学力は上がらなかったというデータもあるので、何とも言えないと思う。

専科については、専科がいない学校だと理科室、家庭科室といった特別室の道具が揃っていなかったり部屋が汚かったりする様で、やはり専科の先生がいた方がより面白い授業もできるし、きちんと道具等も揃えられると思う。

（塩島委員長）

色々な角度からのご意見が出たが、地域の方々の意見はどうですか？

（E 委員）

資料を見ると、確実に子どもの数は減っていく。中学の校長先生の「かけがえのない今」という言葉が印象的だったが、少子化の中でも子どもたちが一生懸命学べるような、地域や保護者、住民や役場も一緒になって子どもたち一人一人を伸ばしていけるようなものになっていけば良いと思う。

（F 委員）

地域の行事とかで、例えばお祭りの神輿担ぎや浦安の舞等で子どもが少なくて悪戦苦闘している状況がある。八方地区にはインターナショナルな子どもたちも多く、行事参加の声かけも考えているが大変な面もある。北小学校の老朽化の話があったが、実は自分が北小学校にいた時は、今の校舎の前の校舎である木造校舎で過ごしていたが、卒業して今の新しい校舎ができた時はすごい校舎ができたと思った。その新しかった校舎もすでに老朽化ということで、年が過ぎたことを感じている。

（G 委員）

海外にルーツを持つ子が学年によっては 10%もいるということで、自分の頃より全然今の方が良いと思うし、少子化は今までのやり方を変えるチャンスのように思う。自分は小谷出身だが、中土小学校・北小谷小学校、南小谷小学校、大網の分校もあって、人数のとても少ない学校から多い学校もあった。A 委員の意見のように、少ないところは少ないなりに良いところがあるし、大きいところは大きいところなりに良い点、やはりそれなりの人数がいないとダメなんだということを痛感した。どちらが良いか、これからどうした方が良いかというのはわからないけれども。

（塩島委員長）

今、学校におけるメリット・デメリットと地域におけるメリット・デメリットについて挙げていただいた。ここで家庭や保護者にとって少子化はどう感じるのか。お聞かせいただきたい。

（B 委員）

自分は南小学校出身だが、１つ特徴として自分の前後６学年の顔と名前は分かっていた。大

きい学校だと名前も知らない、顔も知らないということになるが、そのまま中学校へ行っても、おおよそ皆の顔と名前が相手もわかるし自分もわかるということはすごいメリットだと思う。進学で一度村外に出たが、白馬に戻ってきて消防に入った時に、同学年や前後の年齢の人たちと皆知り合いで、それから更に繋がりが濃くなっていくと思っている。そのためには子どもたちが戻ってくる方法を考えなくてはいけないと思っているけれど。

それから、今、自分の子どもを見ている感じだと、ゲームが好きでやらせているが、既に小学校１・２年生のころから北小の子どもたちとゲームの中で集まって遊んだり、中学生の先輩にも知り合いがいる。自分の時は中学に行って初めて北小の子どもたちと会う感じだったが、自分の時にはなかった新しい時代の出会いが起きていると感じている。ゲームを通して神戸とか他の地域の子どもたちとも交流がある。

（H 委員）

家庭・保護者の面から言うと、私も南小出身で子どもも南小だが、一番下の子どもが今５年生で 16 人しかいないので、上の子どもと比べて PTA 役員が多く回ってくるという負担はある。

議題と関係ないかもしれないが、白馬村の子どもの数の減り方は、全国平均と比べてどうなのか。白馬村の減り方が顕著に大きいというのであれば、感じ方もまた違ってくる。

（教育課長）

だいたい全国的にも同様な減り方をしている。人口の多い方が減り方も大きく見えるから衝撃的な印象を受けるが、小さい村なのであまり衝撃は大きくないが、減り方は同じ。

（H 委員）

白馬村の減り方が他に比べて顕著に大きいということであれば、行政に減らないように考えてもらいたいと思うが、全国と変わりないということならば避けられないこととも思う。逆に小中学校が魅力的であれば、子どもの人口も増えるのではないかと思う。

（塩島委員長）

行政的な面から見たメリット・デメリットについてはどうか。先ほどから施設の老朽化の話も出ているが。

（教育課長）

よく学校統合の話が出てくるが、運営面・経営面から言って、学校を統合したら行政負担が減るかといえば、一概にはそうとは限らない。建設費に莫大な費用がかかってその費用を償還していかなければならないし、例えば学校を１つにした場合に全村的にスクールバスを運行して送迎する経費が生じるので、必ずしも統合したからといって経営が楽になるものではない。しかも白馬村の人口が減ってきて、納税者や生産年齢人口が減ってくる中で運営していくにあたっては、統合はそのための施策ではないと考える。教育委員会としては統合に視点を当てるのではなく、少子化の中でどのようにしていけば魅力的な学校教育が維持できるかということで、皆さんから大人数、少人数なりのメリット・デメリットを伺ったので、それらをまとめさ

せていただければと思う。

（塩島委員長）
　今日は学校、家庭、保護者、地域、行政の面から少子化におけるメリット・デメリットについて考えていただいた。

（A 委員）
　この委員会は統合ありきではないという説明を聞いて安心した。人口が減るから統合すれば良いという短絡的な考えではなく、少ないなら少ないなりに子どもたちのために何ができるのかということを考えていく必要があると思う。

（塩島委員長）
　この委員会では、幅広い自由な意見を出していただいて結構である。最初の委員会の時に、統廃合について決める委員会ではないということを教育委員会から説明してもらってある。ざっくばらんなご意見を出していただきたい。
　まとめに入るが、今日出していただいた意見を今後どのように活かしていくかというところで、「望ましい学校の姿」という形で少し整理をしていきたいと思う。特にデメリットについては裏返せば「望ましい学校の姿」に繋がってくることなので、整理して答申の中に盛り込んでいきたいと考える。学校には長期目標と今年の重点目標があるように学校の思いというものがあり、教育委員会でも村としての教育目標があるが、それらの目標を基本とする中で、皆さんの意見を加味していきたい。
　次回の委員会では、今日皆さんから出された意見を基に少子化の中でも「こんな学校が望ましい」「こんな子どもの姿が望ましい」というものを教育委員会から提案してもらい、その提案内容を基に皆さんに検討してもらう方向でよろしいか。では、次回はそんな形でお願いする。

（教育課長）
　本日いただいた意見を教育委員会でまとめさせていただき、もう少しイメージがわくような「望ましい学校の姿」というものを作成したい。できれば事前に皆さんに資料を配布し、会議の前に考えていただく形にしたいと思うのでお願いする。

○閉　会